
君はサンタクロース

やしろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君はサンタクロース

【Nコード】

N4720P

【作者名】

やしろ

【あらすじ】

クリスマスって、ただのお祭り騒ぎだと思つてませんか？でも、それで幸せになれるんなら、それでもいいと思いませんか？

(これはピクシブ、ノベリストにも載せたものなので転載したものです)

クリスマスはお祭り騒ぎの口実でしかない。そう思っていた。どのカレンダーにもあらかじめ行事として書かれているくせに、とくに何があるわけでもない。教会に行って祈る人なんて日本じゃほとんどいないし、子どもにとってはサンタが買ってくれる日としか思っていないだろう。どこも似たようなツリーが飾られて、驚くほど割高なケーキを買って、特別な雰囲気を楽しむ。きらびやかな外国の行事をまねた、実りのないままごとみたいだ。イルミネーションがどんなに輝いたって、クリスマスソングがどんなに弾んだって、それで私たちが幸せになれるわけじゃないし、たぶん世界が平和になるってこともないだろう。どこか浮足立った人たちを横目で見ながら、そう思っていた。ずっと、そう思っていた。

「サンタは、いるんだよ」隣を歩く翔太は、たしかにそう言った。

今日は12月24日。世間で言うところの、クリスマス・イブというやつだ。

付き合い始めてそろそろ1カ月たつ私と翔太は、もはや習慣のように一緒に学校からの帰り道を歩く。

こうして一緒に帰っていると、いっばしの恋人同士みたいに見えるんだらうけど、私たちが付き合うようになるまでに切ない片思いの期間があったわけではない。少なくとも、私の方は。

翔太が一方的に告白してきて、その勢いに面喰って頷いた。断るほど誠意があつたわけではない。そのうち私に飽きて、勝手に離れていくだろう。情性に任せるのが、一番面倒がなくていい。そう考えてのことだった。

だから、というわけではないけれど、今日がクリスマスだということに、大して興味がなかった。もともと私の家は「クリスマスチャンでもないのにクリスマスを祝ってやる義理はない」と考えているから、小さいころから縁がなかったというのが大きいのもかもしれないけど、それを翔太に話すと、それじゃあおれの家で家族皆でクリスマスパーティーをやるからぜひ来てほしいと言われた。

私に告白してきたときと同じ、勢いがあつて、そして真摯な目をしていた。

私はなんだかたじろいであつて、「クリスマスパーティーなんて子どもじゃあるまいし。まさかまだサンタさんなんて信じてるわけ？」と、ずいぶん子供じみた照れ隠しをしてしまった。

翔太の目は、苦手だった。真剣で、まっすぐで、どこまでも一途な目に見つめられると、自分がひどく情けない、嫌なやつだということとを思い知らされるような気がしたからだ。

自分の大人げなさに後ろめたくなって翔太の方を向けないでいたときに、翔太は言った。

「サンタは、いるんだよ」

小さくはあつたけれど、芯のある、たしかな声だった。

「ちょうど10年前の今日、つまりクリスマス・イブだな。おれたち、そのときはまだ6歳だっただろ？サンタさんの正体を確かめようと、寝ないで玄関口で待ってたんだ」

翔太は昔の記憶をたどるように、自分のなかで整理するように、ひどくたどたどしく話した。

「おれの家、朝起きてみたら枕元にプレゼントが！とか、そういうイベントなかったんだ。友だちはみんな、プレゼント貰ってんのに

さ。どう控えめに言ってもいい子とは言えないような悪ガキのころにもだぜ？すっげー悔しかったし、悲しかったんだよな。

だから、玄関口で待つてればさ、布団にくるまって寝てるより、サントさんが来てくれるような気がしたんだ。サントは煙突から入って来るって歌があるけどさ、おれの家、そんな豪勢なもんついてない、ただの借家だからさ、絶対玄関から入って来るって思ってたんだ」

私は、ペースを変えずに歩き続ける翔太の横顔を盗み見ながら、翔太の小さいころを想像した。

サントの来ない家。何もない枕元。寒空のなか、今まで来たためしのないサントを待ち続ける翔太。

どんな気持ちで、待つていたんだろう。

「玄関でじつとしてるうちにさ、おれ、寝ちゃったみたいでさ。目の前のドアから物音が聞こえてくるから慌てて飛び起きたんだ。おれ、外にいるのは絶対サントさんだと思って舞い上がっちゃってさ、急いで鍵を開けてドアを開けたんだ。

そしたら、サントの衣装とは似ても似つかないような地味な格好したおっさんだったんだ。白いひげも生えてなかったしな。

でも、人間、見た目で判断しちゃいけないって言うだろ？だから、おじさんはサントさんですかって聞いたんだよ」

今考えれば物騒な話だよなあと言って、翔太は笑った。

私は、この話のオチがわかったような気がして、とても笑えなかった。

「そのおっさん、おれとおれの質問にかなり驚いてたみたいだったんだけど、そうだよサントさんだよ、なんて言うわけ。挙句の果てに、この家を案内してくれないか、なんて言うてきたんだよ。おれもバカだからさ、それを真に受けちゃったんだ。トイレにでも行きたくなつたんだらう、だからおれの家に寄ってくれたんだ、なんて考えてさ。

で、トイレに案内したら、そこには用を足しに来た親父が先にいた

わけ。

そつから先は大変だったよ。おっさんは逃げ出すし、親父は怒鳴りながら追いかけるし、おふくろはおれを抱きしめてわあわあ泣きだすし。あれは聖夜なんてもんじゃないね」

「そのおじさん、泥棒だったってこと？」私は何て言ったらいいのかわからなくて、とりあえず一番聞きやすいことを口にした。

「うん。そのおっさん、ちゃんと捕まった。それでこの辺を物色してた空き巣だったってわかったんだ。クリスマスって、浮かれて戸締りが甘くなったりする家が多いらしくて。まあ、おれの場合、自分で招き入れちゃったんだけど」

「それじゃ、サンタは結局、いなかったってことにならない？」翔太の話を聞く限り、翔太のためにプレゼントを運んできたわけはなみみたいだし。

翔太は私の言葉に首を振ると、微笑んだ。

「そのおっさんは空き巣だったけど、おれにとってはサンタだったんだ。ちゃんと、プレゼントを運んできてくれた」

その笑顔があんまりにも柔らかかったものだから、私は自分の顔が熱くなつていくのを感じた。

「おれの親、実はそのときすっげー険悪でさ、離婚寸前だったんだ。もうお互いに口利かないし、干渉しませんって感じでさ。」

でも、その騒動のおかげでさ、親父もおふくろもおれを抱きしめて泣いてくれたんだ。無事でよかった、って。まあ、その前に親父にはげんこつ一発くらって、おふくろには往復ビンタされて、おれも泣いたんだけどさ。

3人でひと固まりになってバカみたいに泣いてるうちにさ、たぶん3人とも思ったんだ。こうやって3人で泣けなくなったら、それですごく悲しいことなんじゃないかって。

それから、少しずつ親父とおふくろがまた昔みたいに話すようになっていったんだ。おれも、二人が仲直りできるようにいろいろ動くようになった」

翔太はそう言うと、ちょっと恥ずかしそうに続けた。

「その年、おれがサンタさんに頼んだプレゼントはさ、おれのお父さんとお母さんが、また前みたいに仲良くなつてほしいってことだったんだ。だから、そのおっさんはサンタだったってわけ」

私は、自分のなかでいろんな感情が洗濯機のなかみたいにくるぐる回っていくのを感じた。

そして、一呼吸おいて言った。

「バカじゃないの」

自分の手が震えている。これはきつと、12月の冷気のせいだ。

「翔太、下手したら死ぬとこだったよ。両親の不仲なんて、翔太の責任じゃないじゃん。サンタなんて、ただのおっさんだよ？叶えてくれるわけないじゃん。」

もつと、子どもらしいこと頼めばいいじゃん。

おもちゃとか、高いスポーツ用品とか。クリスマスなんて、みんな浮かれてんだよ？自分が楽しい気分になることしか考えてないんだよ？まだ6歳の翔太が、大人のことまで考えてやることないじゃん。そのおっさんに感謝するなんて変だよ、翔太、ひどい目に遭つてたかもしれないんだよ・・・」

声まで震えてきた。自分でも、何を言っているのか、何を言いたいのかわからない。

それでも、いろんなことが間違っているような気がした。

幼い翔太を利用しようとした空き巢のおっさんが、クリスマスにすら子どもに気を配れない翔太の両親が、無垢な翔太が、ただ華やかであろうとするクリスマスが、みんなまとめて間違っているような気がした。

でも、そのなかで一番おかしいのは、私だ。

なんで、こんなに取り乱しているんだろう？なんで、こんなに腹立たしいんだろう？なんで、こんなに胸が苦しいんだろう？

急に、震えていた手が止まった。翔太が握ってきたことに気がついた。

「おれ、なんか、すげー嬉しい。いつも、おればっけり穂波のこと好きだと思ってたから。おれのことこんなに言ってくれて、すごく、幸せ」

私は、もうそれ以上、何も言うことができなかった。

おればっけりつて、なによ。私があんたのことを、好きだとも？私は別に、あんたが好きじゃやない。頼まれたから、断ってしまえるほど思いやりなんて持ってなかったから。ただ湧きあがってきた言葉を言ったただけだから。

そんなセリフが、たしかに頭のなかに用意されたけど、口にできるほど、私は嘘が得意じゃない。

一緒にいるうちに、翔太のまっすぐな目が、お人好しが、ちょっと危なっかしいくらいのお優しいさが、私にとってなくてはならないものになってしまっていたみたいだ。

たしかにそう感じて、でもうまく伝えられる言葉が見つけれなかった。私が知っている言葉じゃ、どれも正確に伝えられない気がした。

翔太とつないだ手が、冷たい風から離れ、ほのかな熱を持ち始める。この熱で世界中の人が暖められるわけじゃないけど、私にとっては、これ以上はないたしかなぬくもりだ。

握った手に力を入れると、私は震えないように気をつけながら、つぶやいた。

「私には、翔太がサンタだから」

翔太の驚きが、握った手に響いてきた小さな振動でわかった。

私は笑って、その振動を返した。

このぬくもりが、ここにある。

こんなに貴いプレゼントは、他にない。

クリスマスなんて、ただのお祭りだし、良い子にプレゼントを運んでくれるサンタクロースなんて、実際にはいない。

だけど、私たちにはもっと大事なことがあるし、大切な人がいる。
そして、そういう、なくてはならないものこそが、私たちにとって
のサンタクロースなのだ。
それをわかるためだけにでも、クリスマスは輝く価値がある。
今は、そう思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4720p/>

君はサンタクロース

2011年10月8日03時12分発行